

《ブルグマン病院》はヴィクトール・オルタが1906-1923年に手がけた総合病院である。ブリュッセルの自然溢れる広大な敷地に、外科や内科などの治療施設のほか、関係者の住宅やチャペルなど低層の建物13棟が点在している。赤オレンジや白の煉瓦を様々に組み合わせた建物は、周囲の緑と調和し、患者や訪れる人々にとって心地よい空間を生み出している。

オルタはアール・ヌーヴォーの個人邸宅の設計でその名を知られるようになった一方で、回想録のなかで「建築家とは公共建築を手がけてこそ、高い地位を得られるものだ」と述べ、公共建築の設計を彼の建築家人生において大変重視していた。オルタは《ブルグマン病院》の設計にあたり、ヨーロッパ中の当時の最新の医療施設の調査を行った。また、本作の設計に関する著作物を出版しており、非常に力を注いでいたことが明らかで、彼の後期の活動を考える上で重要な作品として位置づけられる。

《ブルグマン病院》に関する研究は、近年になって本格的に進められているが、その大半は伝染病の院内感染の防止や換気、採光のシステムなど、衛生面や入院患者の精神面に配慮した建築コンセプトの近代性が主なテーマとなっている。これに対し、デザインに関しては、オルタが過去に設計した個人邸宅の豪華さとは異なる、経済的な問題と機能重視の考えから生まれた簡素さが指摘されるに留まっており、十分な考察が行われているとは言いがたい。

そこで本発表では、オルタの著作やノート、アーカイヴに残る当時の写真のほか、発表者が今回行った現地調査をふまえ、《ブルグマン病院》の外観のデザインについて考察する。特に、彼がヨーロッパの医療施設について実施した調査の結果をどのように外観のデザインに活かしたのか、また、経済的制約のなか、いかにして独自の様式や建築理論を盛り込み、さらには新たな試みを行ったのかという点に注目する。

例えば、素材に着目すると、本作ではオルタの作品では珍しく、ファサードのほぼ全面に、石ではなく、煉瓦が使われている。オルタがファサードに煉瓦を使用する場合、煉瓦をあくまで脇役として使用することが多かったが、ここでは縞や点線、十字など様々なモチーフを使って、建物や側面ごとに異なるデザインをつくり出し、従来のオルタの作品とは異なる外観を生み出している。同時に、他の彼の作品に特徴的な緩やかな曲線も煉瓦を使って表現しており、彼の美学を刻み付けることも忘れていない。また、本作では煙突や換気口のような建物として不可欠な要素が、デザインの一部として昇華されている。このように本作には、オルタのデザインにおける新たな展開を見出すことができるのである。